

総括

木下尚子
熊本大学

KINOSHITA Naoko
Kumamoto University

本研究の目的は以下の二つである。

1. 今帰仁タイプおよびビロースクタイプ磁器を対象に、消費地においては所属時期を、生産地においては生産窯を特定して、これらの流通状況を具体的に把握する。
2. 13～14世紀の琉球列島の背景をなす東アジアの歴史状況をあわせて検討する。

以下、本書の構成に添って個別の研究結果を整理しながら、全体の成果を総括したい。

なお、本研究の主要な対象となる磁器はこれまで今帰仁タイプ白磁・ビロースクタイプ白磁とよばれ、現在この名称が定着している。しかし白磁・青白磁の分類について、日中間に一致しない面があり、このためビロースクタイプおよび今帰仁タイプ磁器は、日本では白磁、中国では青白磁に分類されている。日中共同研究の本研究では煩雑さを避けるために、原則的に単に今帰仁タイプ・ビロースクタイプと呼ぶことにし、個別の表現では、中国・日本ともにそれぞれの定義にもとづいておこなうことにした。また文脈によって、琉球列島を南島、琉球列島以外の日本列島を大和とよぶ。

1. 今帰仁タイプおよびビロースクタイプの生産と流通

1.1. 今帰仁タイプとビロースクタイプ

1.1.1. 今帰仁タイプ

金武正紀の定義によると、今帰仁タイプ碗は以下の特徴をもつ碗をさす。

- ・器形：薄手の直口口縁碗
- ・口唇部：内部に稜を設ける。
- ・底部：高台が外側へ広がり、畳付外側に面取りをせず、外底の高台際を篋で削って三角状に凹める。

金武は、口唇部形状と内底の釉の範囲によってこれをさらに3分類している（図1）。

I類：口唇部上面を平坦にする。内底に幅広の蛇ノ目掻き取り（輪状釉剥ぎ）が回る。

II類：口唇部上面を平坦にする。内面下位から内底まで露胎にする。

III類：口唇部を丸く仕上げる。内底露胎と、内底まで施釉したものがある。

これらは今帰仁グスクを特徴づける磁器であることから今帰仁タイプと命名された。

1.1.2. ビロースクタイプ

金武によるビロースクタイプ碗は、以下の特徴をもつ。

- ・器形：厚手の内彎型碗。器表面にロクロ痕が稜線状に廻っているものが多い。
- ・底部：畳付は幅が広く、水平に切られている。

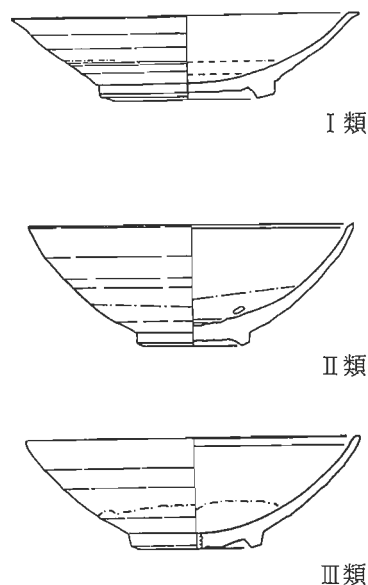


図1. 今帰仁タイプ
すべて今帰仁グスク出土

・釉：薄く、内底から外面の腰部か高台脇までかかる。

・胎土：白色及び黄白色の微粒子

金武は、口唇部形状と内面の施文によってこれをさらに3分類している（図2）。

I類：口唇直下の外面を指でおさえてロクロを回し、口唇外端を尖らす。口唇内端は丸い。内面上部には陰圏線を1本廻らす。ときに下部に櫛描き文がはいる。

II類：口唇内端は内向し、稜を示すものが多い。口唇は丸みをもつ。I類より浅い傾向がある。

III類：口縁部は外反する。内底が平坦で、そこに多く印花文を施す。

ビロースクタイプは石垣島ビロースク遺跡出土の内彎型碗に由来する型式名である。

1.2. 生産地の特定

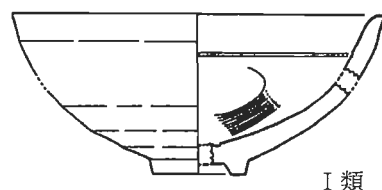
1.2.1. 連江浦口窯と今帰仁タイプ（図3）

連江浦口窯は福州市の東北35kmの連江県浦口鎮に所在し、定海湾に注ぐ敖江口北岸に位置している。浦口窯は外厝山・錦山尾・西山など10万m²の範囲に広がる複数の窯跡群からなり、これまでの考古学調査によって龍窯の存在が確認されている。製品は南宋代から元代にいたる青磁を主体に青白磁（日本でいう白磁）・少量の黒釉器がまじる。これらは、博多や遺跡前の定海湾沈船で大量にみつまっている。

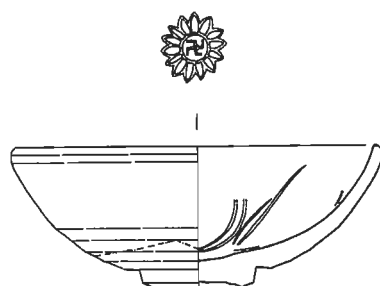
遺跡では、東中国海にのびた黄岐半島を東西に走る連黄公路の両側に窯廃棄物の堆積が認められる。2年間にわたって5地点を踏査した結果、上元山採集品について、「底部の造り、見込みの露胎・施釉の方法、口縁端の調整、器形的な特徴など今帰仁タイプと多くの類似点を認め」、「総じて今帰仁タイプと共通点が多く、製品の特徴としては概ね同品と認めるに値するものである」（宮城弘樹）という結論をえた。

1.2.2. 閩清窯とビロースクタイプ（図4）

閩清窯は、福州市閩清県東橋鎮に所在する窯跡群である。閩江中流域に位置し、閩清縣市街地から北西約8km、閩江支流安仁溪が北から本流に合流する地点から安仁溪流域一帯にかけて安仁溪窯・義窯・青窯の3窯跡が分布する。これらの窯で北宋晩期から元末・明初に白磁を主体として青磁・黒釉器が焼かれた。製品は西沙群島や広東の沈船でみつかっており、東南アジア方面に輸出されていたことが



I類



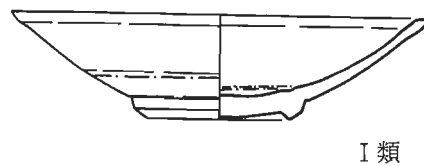
II類



III類

図2. ビロースクタイプ

上から、ビロースク遺跡・今帰仁グスク・住屋遺跡出土



I類



II類

図3. 連江浦口窯・上元山採集品

今帰仁タイプ

知られるほか、北宋後半～南宋前半の白磁は日本へ大量に輸出された。

上記3窯跡で踏査をおこない、さらに福建博物院に保管されている資料を調査した結果、安仁溪窯・義窯内の4地点・青窯においてビロースクタイプⅠ・Ⅱ・Ⅲ類すべてを確認した。このほかに閩江下流域にある閩侯県鴻尾窯でもⅡ類とⅢ類を確認した。「窯跡資料との比較・検討の結果、日本で出土するビロースクタイプの生産地に、少なくとも閩清義窯・青窯が含まれることは確実である」(田中克子)。

以上から、今帰仁タイプの生産地は福建省連江浦口窯、ビロースクタイプの生産地は同じく閩清義窯・青窯を含む窯であることが明らかになった。

1.3. 消費地と時期の特定

1.3.1. 南島における消費状況

宮城弘樹・新里亮人によると、南島において今帰仁タイプおよびビロースクタイプは227遺跡において合計2906片が出土している。宮城・新里はこれらの分布を検討し、以下を指摘した。

- ・今帰仁タイプは奄美諸島に稀で、沖縄諸島以南に多い。
- ・今帰仁タイプ・ビロースクタイプⅠ・Ⅱ類は先島諸島に多く、ビロースクタイプⅢ類の出土は奄美諸島、沖縄諸島に多い。

金武正紀は、この二つの磁器が層位的に出土している今帰仁城跡主郭の検討から、以下の年代比定をおこなった。

- ・今帰仁タイプの登場：13世紀後半
- ・今帰仁タイプの盛期：13世紀末～14世紀初め
- ・今帰仁タイプの終末：14世紀中頃
- ・ビロースクタイプⅠ・Ⅱ類：13世紀末～14世紀前半
- ・ビロースクタイプⅢ類：14世紀中頃～15世紀初め

以上をもとに宮城・新里は、今帰仁タイプ・ビロースクタイプの陶磁が「先島諸島を経由した搬入ルート」によって、南から北へとはいった可能性の高いことを指摘した。

1.3.2. 九州における消費状況

田中克子は博多遺跡群と鷹島海底遺跡における今帰仁タイプとビロースクタイプを検討した。博多遺跡群は古代の貿易都市博多の変遷を伝える遺跡で、地下に11世紀以降の膨大な中国陶磁を包蔵する。田中はこれらの中から今帰仁タイプとその関連資料15例とビロースクタイプ20例を抽出して、以下を指摘した。

- ・博多に琉球列島と同様の今帰仁タイプはほとんどない。
- ・博多にビロースクタイプⅠ類はなく、Ⅱ類は14世紀前半に少量みられる。Ⅲ類はやや多く、その時期は15世紀前半頃と考えられる。

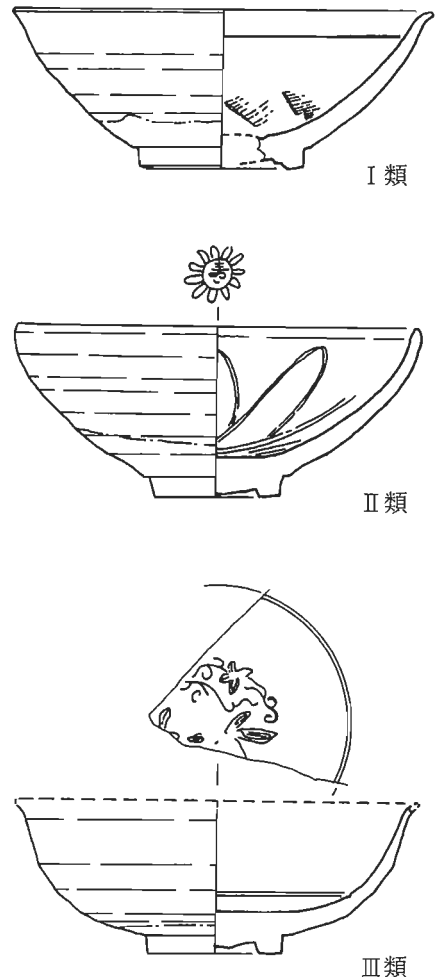


図4. 閩清青窯・窯隔採集品
ビロースクタイプ

鷹島海底遺跡は長崎県松浦市鷹島の南岸沖にあり、2度にわたる元寇のうち弘安の役（1281年）時の暴風雨によって元軍船が沈没した場所とされている。本遺跡出土品は元軍の携行品とみられ、その年代は一般の遺跡出土品と比べてより生産年代に近いと考えられる。この製品を検討した田中は、1281年に今帰仁タイプの生産・流通はまだ本格化していなかった可能性が高いことを指摘した。

1.4. 貿易船の出航地

栗建安は、連江定海と東絡島で海底から元代の閩清窯の製品が引き上げられていること、前者ではビロースクタイプⅠ類・Ⅱ類が認められることを示した。栗はまた連江定海の沈船・同東絡島の沈船・韓国新安沈船の搭載していた陶磁器・出発地とみられる港・沈船の位置などから、これらが中国沿岸の港から東アジアに向かって北上する貿易船であったことを指摘した。連江定海湾の沈船は、閩江下流域の港から貿易船が海外に出港していたことを示唆する。

1.5. 生産地と消費地の対応

今帰仁タイプが連江県浦口窯産製品でビロースクタイプが閩清窯産製品であることを客観的に確認するために、二つの機関において蛍光X線を用いた胎土分析をおこなった。資料の海外もちだしに制限があるため、今帰仁城跡出土の試料を仲立ちにして、中国で連江県浦口窯・閩清窯・今帰仁城跡出土今帰仁タイプおよびビロースクタイプを分析し、日本で博多遺跡群と今帰仁城跡出土今帰仁タイプおよびビロースクタイプを分析した。分析は釉薬と胎土をわけて行なった。二つの結果を分析した田上勇一郎は以下を指摘した。

- ・中国科学院上海硅酸研究所による分析では、胎土・釉薬ともに閩清窯・浦口窯を二分できなかったが、一定の分類傾向は得られた。今帰仁城跡出土の今帰仁タイプの2例は上元山にもっとも類似していた。
- ・福岡市埋蔵文化財センターでおこなった分析では、形態分類と胎土分析の結果が、胎土・釉薬ともかなりの確率で一致した。
- ・今回の分析は窯出土資料数が少なかったために、結果が事実を十分反映できていない面がある。今後比較対象以外の窯資料の分析をも含めて、分析例数を増やす必要がある。

1.6. 生産と流通

田中克子は以上の調査結果を、生産と流通の観点から次のようにまとめた。

連江浦口窯では、12世紀後半以降輪状釉剥ぎによる重ね焼きの方法を踏襲しながら次第に今帰仁タイプへと続く製品を作るようになり、13世紀後半に今帰仁タイプを生み、同時に量産化を目指して内底を露胎にする方法も始めた。14世紀前半にこの方法が主流になるが、14世紀中頃には衰退した。

閩清窯・青窯は13世紀後半にビロースクタイプⅠ類を生産していた可能性が高い。Ⅱ類は13世紀末～14世紀初頭に生産が始まり、14世紀中頃までに生産のピークを迎え、同時に外反口縁のⅢ類への変化が始める。Ⅲ類は明代前半にかけて大量に生産された。

南島において、13世紀後半以降朝貢貿易が開始されるまでの貿易陶磁器の出土状況は、今帰仁タイプ・ビロースクタイプを除けば大和での内容と大差なく、博多を中心とした国内流通圏の中に取り込まれていたと考えられる。この中であって今帰仁タイプ・ビロースクタイプのみが博多から沖縄諸島の間にも全くといっていい程持ち込まれていないのは、これらが博多からの流通ルート内に初めから含まれていなかったためであろう。すなわち、13世紀後半を境にそれまで形成されていた国内流通圏と

は別に、沖縄諸島から先島諸島にかけて新たな流通圏が形成され、今帰仁タイプ・ビロースクタイプはこの中で消費された製品であったとみられる。宮城・新里の指摘のように、今帰仁タイプ・ビロースクタイプⅠ・Ⅱ類が、福建から八重山・宮古諸島・沖縄諸島へと北上するルートによって運ばれてきた可能性はきわめて高い。

新里亮人は、九州と南島における中国陶磁器全体を対象としてその需要状況の推移を分析し、この動きを把握しようとした。膨大な資料操作の結果、11世紀後半から15世紀前半に至る九州（北部九州・西北九州・東九州・中九州・南九州）と南島の消費動向を析出し、南島のみが11世紀以降その消費を増加させていること、これが今帰仁タイプ・ビ

ロースクタイプの南島への搬入と軌を一にしていることから、「当該期の琉球列島には、九州地方とは異なる経済状況の中で中国陶磁器が持ち込まれた可能性が考慮される」と指摘した。

以上から「14世紀後半に始まる『進貢貿易』以前に（沖縄と：筆者注）中国との直接取引があった」とする2004年の田中克子の指摘（森本・田中2004, p. 366）の妥当性を考古学的に示すことができた。

2. 琉球列島の背景をなす13～14世紀東アジアの歴史状況

13～14世紀の琉球史の背景をなす事象－インドネシア・マレーシアにおける貿易陶磁の状況、福州・琉球関係と福州港の変遷、日中における「琉球」認識の変遷、宋・元代の地方行政の各テーマが、それぞれ専門の立場から論じられた。

2.1. 福建省閩江流域の窯業史

栗建安は、閩江流域における窯業史を概括した。栗は懷安窯・将口窯・建窑庵尾山窯・松溪回場窯など15の窯跡を紹介し、これらを通して以下をのべた。この地の磁器生産は北から武夷山をこえて窯業技術が伝来したことで始まり、南朝期（6世紀前半）には福州の懷安窯で青磁が焼かれた。その

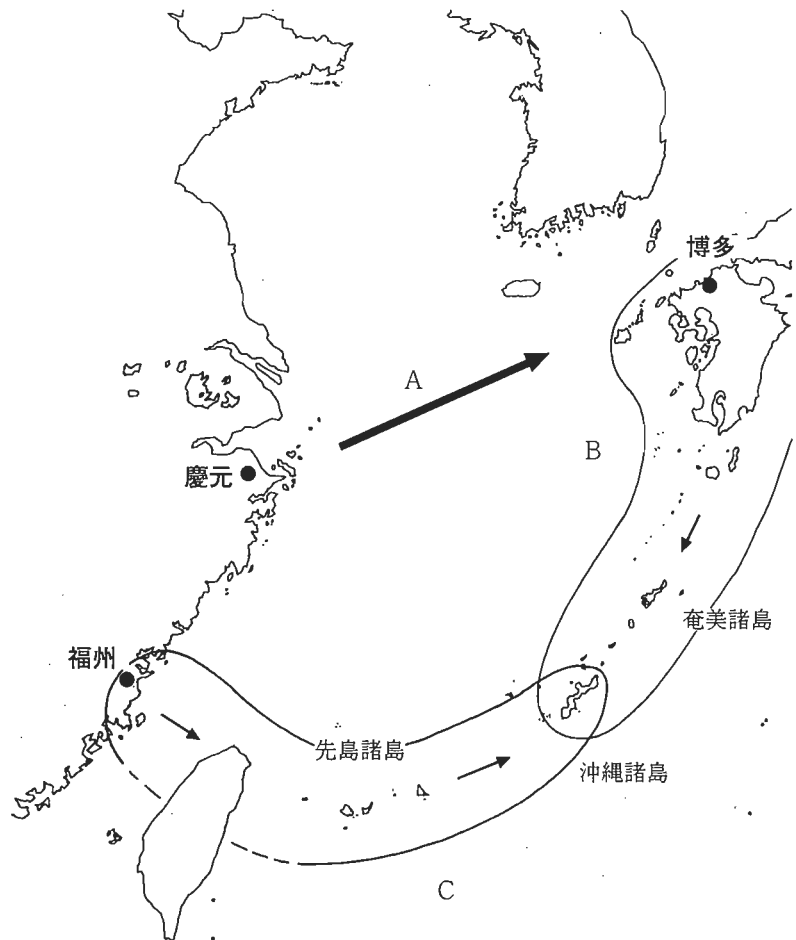


図5. 13世紀後半～14世紀前半の二つの交流圏

- A: 慶元から博多に向かう中国陶磁の動き
- B: 博多を起点にする中国陶磁の流通圏
- C: 福建を起点にする中国陶磁の流通圏
- : 陶磁の移動方向

後唐・五代期を通して福建の窯業は発展し、一部には海外への輸出がはじまった。宋代には閩江流域全体に窯業がひろまり福建の窯業は最盛期を迎える。その特徴は、①窯の増加と分布の拡大、②窯の大規模窯と生産量の増大、③器種の充実と品質の向上である。しかし元代になると閩江流域の窯業は衰退しはじめ、生産地は閩江下流域に集まるようになる。明清期には窯場の数が減り、小規模化して周辺の市場への供給にとどまるようになった。以上から琉球が閩江流域と関係をもったのは、この地の窯業の衰退期であったことが理解される。栗は今回の共同研究の意味を、こうした時期に閩江流域と琉球に新たな経済関係にはいり、博多となお密接な経済関係が継続していたという事実が実証された点にあるとしている。

2.2. 東南アジアの貿易陶磁

森本朝子は、近年情報量の増した東南アジアの貿易陶磁を対象に、本研究のテーマにそって13～14世紀の福建産粗製陶磁に注目したレポートをまとめた。対象としたのはインドネシアの港市国家バンテンの都市バンテンギラン、マジャパヒト国の首都とされるトロラン、トロランの港であったトゥバン、マレーシアチオマン島（テルニッパ・カンボンジュアラ）、フィリピン諸島南部（グアテコレクション資料）における中国陶磁である。森本は以下を指摘している。

- ・東南アジアでは11～12世紀前半に広東産陶磁が主流であったが、12後半～13世紀には福建産陶磁がこれに取って代わる。福建省連江浦口窯や閩清窯の陶磁はこの変化の先駆けとして登場した製品である。東南アジアに今帰仁タイプが登場するのはこの後である。
- ・13～14世紀に東南アジアに輸出された輪状釉剥ぎの碗は、連江浦口窯や莆田窯産のほか多くの泉州地方産を含む広域産品であった。
- ・インドネシア・マレーシア地方での中国陶磁の出土量は、元による侵攻とマジャパヒト建国に起因する地域の再編によって、13世紀末ごろに突然急増する。

森本の報告は、実地調査にもとづいて東南アジアの13～14世紀の福建産粗製陶磁の動向を整理した貴重な記録である。

2.3. 福州港と中琉往来

北に揚州・南に広東・泉州という国際貿易港にはさまれた位置の福州が、中国東南沿岸の貿易港として突出した意味をもつようになるのは、福州に柔遠駅（市舶司）がおかれ、ここが中琉貿易の拠点になる明成化年間（1465～1487）以降だという。謝必震は文献資料をもとに、福州港の発展過程を整理した。

三国時代、呉は東南沿岸に進んで、現在の福州市で海船を造らせ、現在の霞浦で大規模な造船基地を営んだという。唐代、福州は泉州とともに海岸を南移北上する船舶の寄港地となり、福州港は海外貿易の門戸になっていく。五代時代、琅琊王となった王審知は福州港の北に黄崎港と甘棠港を拓き、対外貿易を促進したとされる。当時の貿易品リストは、東南アジアとの貿易がすでに始まっていたことを示している。宋代には沿海四州の軍都に造船工場がつくられ、福建は造船業で名を馳せる地となる。元代には国際貿易港泉州の繁栄と歩調を合わせるように港として栄え、明代の鄭和の遠征では多くの船・人員が福州から提供されたという。15世紀後半、港湾機能の衰えた泉州から市舶司が福州港に移動してくるのも、ここが琉球国との往来に、造船を含めて対応した基地になったことも、こうした前史をふまえると理解しやすい。

2.4. 東アジアにおける「琉球」認識の変遷

大田由紀夫は中国・日本の13・14世紀に記された諸史料より窺える「琉球」が、いかなる過程で「琉球＝琉球王国」とする認識に至ったのかを以下のように検討した。

宋・元代の中国人は、「琉球」を福建東海にある未開の島であると認識していた。それは台湾であることが多かったが、実体は曖昧かつ抽象的なもので、常に「琉球」が台湾だったともいえない。一方同時代の中世日本にとって、「琉球」は奄美以南に漠然と存在する恐るべき異界であった。つまり13・14世紀の東アジアには、二つのきわめて曖昧な「琉球」認識があった。この認識は明初期にいたって融合され、「琉球」という名称のなかに台湾と沖縄が包含される状況が形成されたのち、台湾と沖縄を区別する呼称（「大・小琉球」）が生まれ、「琉球」認識はひとつの共通認識のもとへ整序されていった。

大田はこの認識変化の契機が、明の使者・楊載が、訪日の際（14世紀後半）に「琉球（≡沖縄）」の情報を得、そのために沖縄への遣使が実現されたことにあるとする。つまり中国が日本を介して沖縄を認識し、自らの「琉球」認識を具体化していったとみた。大田の検討は、「琉球」の所在地をめぐって現在なお決着をみない論争の後半部分について最新の成果をとり入れた再整理といえる。15世紀前半に名乗りをあげた島国の名がなぜ「琉球」になったかを考えるための貴重な提言といえよう。

2.5. 宋・元代の江南の地方行政

宋・元代、農村で生活する多数の人々は公課負担役の義務を負っていたが、中央政府は彼らの中の富裕民に催税など行政の末端業務をも課し、彼らはその負担に苦しむことが多かったという。伊藤正彦は、宋・元代の職役制度の実態を分析することで、明初に登場した里甲制という人民編成成立の歴史的意味を追究した。宋・元代の中国では土地を所有する人戸のなかで一定の階層以上の人戸のみが徭役の義務を負っていた。里甲制体制は、これを改め土地所有戸すべてが租税と徭役を負担する原則を実現したもので、秦・漢期、隋・唐代につづく3度目の「正役」体制であった。里甲制とは1里＝110戸で編成された組織に1年交替の輪番で1里長戸と10甲首戸の計11戸が共同で徴税業務にあたり、10年で一周する原則をもつ制度である。伊藤はこの制度の実現が、元代後半期の江南において土地を所有する農民が経済的に成長し、徴税業務の共同化や就役期間の短縮化に尽力していた延長上にあることを、江南の地方志・文集、『黄冊』とよばれる戸籍兼租税・徭役台帳（抄本）のデータを用いて実証的に示した。

中国では上からの権力組織と、末端行政を担う農民との間に支配・被支配をめぐる合意が欠落していたらしい。この構造は為政者が漢民族であろうと異民族であろうと無関係に存在したようである。考古学では接することの困難な社会組織について、日中間の本質的な違いを間近に感じさせてくれる論考である。

3. 研究の成果と今後の課題

今回の共同研究では以下を明らかにすることができた。

1. 今帰仁タイプは福建省浦口窯で13世紀後半～14世紀前半に焼かれた磁器である。ピロースクタイプⅠ類は同じく閩清義窯・青窯で13世紀後半に作られた。同Ⅱ類は13世紀末～14世紀初頭に生産が始まり、14世紀中頃までに生産のピークを迎え、同時に外反口縁のⅢ類への変化が始まった。Ⅲ類は明代前半にかけて大量に生産された。これらは東および東南アジア各地に輸出され、その一部が琉球列島に直接もたらされた。

2. 13世紀後半から14世紀前半、福建から先島諸島・沖縄諸島にいたる交流圏が新たに形成された。この交流圏は、福建⇒先島諸島⇒沖縄諸島の方向性を持ち、中国側の基地として福州港がかかわっていた可能性が高い。

13世紀後半から14世紀前半、すなわち元代に福州港から沖縄諸島に向かう動きが生まれたのはなぜだろう。これについては貿易による経済関係がこの時期成立していたからだとする考えが、数人の論者によって示された。

金武正紀は、福州と琉球の島々が朝貢貿易以前の13世紀後半～14世紀前半に盛んに交易したとし、これまでの調査成果をもとに沖縄本島では那覇港北の安謝川河口が、八重山では石垣島の名蔵湾一帯が貿易港であった可能性を示した。また具合的な航路として、福州→与那国島→石垣島→宮古島→沖縄島、福州→八重山・宮古と福州→沖縄島、各島が直行ルートで福州と貿易するルートを示した。

宮城弘樹・新里亮人は、「琉球列島における中国貿易は今帰仁タイプ・ピロースクタイプⅠ類の時期に用意され、ピロースクタイプⅡ類の時期に安定的となり、ピロースクタイプⅢ類の時期に完成したものと考えられる」として、段階的ながらも同様の考えを示している。

田中克子も「今帰仁タイプ・ピロースクタイプⅠ・Ⅱ類は、福建から八重山・宮古諸島、さらに沖縄諸島へと北上する交易ルートによって運ばれてきた可能性は十分考えられる」として、これが経済的な動きであることを想定している。しかし「これがとりもなおさず当時の琉球と中国との直接交易に繋がるとは言い難い。なぜならこのルートの最終目的地はあくまでも『博多』であり、両製品はその経路の途中で琉球諸島に受容されたものなのか、或いは最終目的地はこの地であったのかは、多方面からの立証を必要とするからである」として、金武・宮城・新里とは異なる考えを示している。

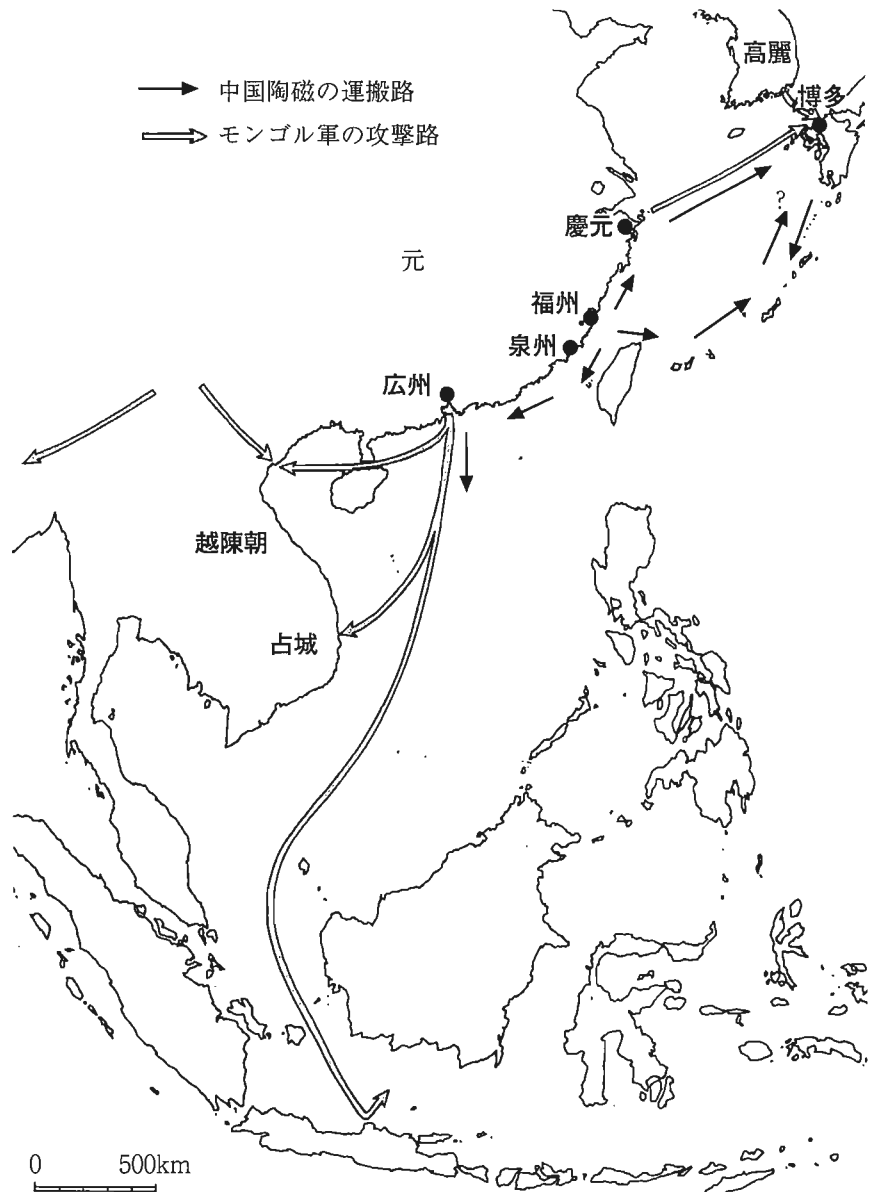


図6. 13世紀後半のモンゴル軍の侵攻路と中国陶磁の移動路

森本朝子は、この現象を元朝の動きにともなう「アジア全体を巻き込んだ大きな流れの中で起きたものと捉え」、「琉球の船が直接中国に行ったか行かなかったかで終わる問題ではあるまいと思う」として、この問題をアジア的な視野で捉える必要性を説いた。

上記の指摘はすべて今回の共同研究の先にある。論者によって今後それぞれに深められてゆくことだろう。

13世紀後半、福州港から、どのような人々が、いなかの目的で八重山諸島に向かい宮古諸島に進み、そこからは見えない沖縄諸島になぜ行ったのか。その船は博多を目指したのか目指さなかったのか。13～14世紀に焼かれた今帰仁タイプ・ピロースクタイプが博多にほとんどみられないのはなぜなのか。粗製磁器を大量生産した経済的背景、福州周辺の窯の実態はどのようなのか。これらはみな、今回の研究でみえてきたこれからの課題である。

文献

森本朝子・田中克子2004「沖縄出土の貿易陶磁の問題点－中国粗製白磁とベトナム初期貿易陶磁－」『グスク文化を考える』、pp. 353～370、新人物往来社

『朝日＝タイムズ 世界歴史地図』第2刷 1980